

校長室だより

国立市立国立第七小学校長 森田弘文

平成27年3月25日 NO.37

ご卒業おめでとうございます。(学校長式辞より)

卒業生のみなさん。ご卒業おめでとうございます。

今日、みなさんのためにたくさんのお客さん達がお祝に来てくれました。卒業生、保護者、教職員を代表して、お礼を申し上げたいと思います。

本日は、ご多用の中、おいでいただき、誠にありがとうございます。ありがとうございます。

さて、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠にありがとうございます。小学校の全教育課程を修了し、今日、巣立ちゆく子ども達の姿は大変凛々しく立派であります。これまで様々なご苦勞があったかと思えます。6年間という月日には、楽しい事、嬉しい事はもちろん、悲しい事、つらい事もあったかと思えます。そのような時、お子様の心の支えとなり、温かく見守り励ましがあったからこそ、今日を迎えることができたと思えます。感慨も深いことと存じます。ご卒業、誠にありがとうございます。

卒業生の皆さん。今日はみなさんに最後のお話をします。それは命の大切さ、生きることの大切さということです。ずいぶん昔の話で申し訳ないのですが、忘れられない出来事があります。それは、校長先生が大学生の時の事です。先生のお兄さん、兄が23才という若さで亡くなりました。ガンという病気でした。何事にも不平不満を言わず、とても優しく立派な兄でした。体の具合が悪くなり、お医者さんに行くと、すぐ入院・手術で、医者からは、あと3カ月の命だと宣告されたのです。寒い12月の年末のことでした。

その後、手術の後は1度は退院できましたが、ガンという病気は恐ろしく、日に日に兄の体をむしばんでいきました。ガンの末期とは大変な苦しみを伴います。今から35年以上も前、医学も今と比べれば発達していなかったのでしょうか。痛みを抑えるためにモルヒネという薬を打ち続ける日々でした。あまりにも強い薬なので打つ回数も制限されていました。兄は、病室で痛みと戦いもだえ苦しみながら「もう生きていたくない。もう死にたい。」と何度も泣き叫んでいました。私たち家族は何もできません。そんな兄は自ら命を断とうとさえ考えていました。亡くなる最後の1カ月は、看病する私たち家族も疲れ果て、私もその1カ月で体重が10キロも減ったことを覚えています。

サクラの花が咲き、若葉になる4月下旬、病魔と闘った兄は、23年という短い命ではありましたが一生懸命に生き切り、世を去りました。「もう生きてたくない。もう死にたい。」と言っていた兄でしたが、本当は、「まだ生きて、あれもこれもやりたい、」という思いでいっぱいであったと思います。それから私は、兄の分まで生きなければならないと強く決意し、現在に至っています。まだまだ努力の足りない自分で日々反省ばかりではありますが、人の命の大切さ、尊さを学ばせてもらった兄には、いつも心から感謝している毎日です。

人が人として生を受ける事は稀なことであり、毎日を生けることは、それはそれは素晴らしいことなのです。1日1日は貴重であり、世界中の宝物を集めるよりも、1日でも多く生き抜くことに価値があるのです。120歳まで生きて名を腐たして、つまり汚名を残して悪い事をして生きるよりも、生きて1日でも名をあげる、つまり有名になるということではなく、その人なりに日々充実した生き方、をすることに価値があるということです。

生きているということ。それ自体を喜び楽しむことが大切なのではないのでしょうか。

これからのみなさんの人生において、様々な喜びや楽しみ、そして、苦しみ悲しみを経験することでしょう。しかし、どんなに苦しいことがあってもそれに負けないで下さい。どんなに暗く寒い冬が続いても春はきます。冬は必ず春となるのです。卒業生のみなさんの成長を誰よりも願っているおうちの方がいます。友達がいます。これから様々な人々とたくさん会うことと思いますが、みんなの皆さんの見方です。たくさんのお支えをしてくれることでしょう。

国立七小の卒業生のみなさん1人1人は、みんなきらきらと輝くすてきな個性をいっぱいもっています。みなさんの将来が、明るく健康で希望に満ちたものになることを祈り、私のお話を終わりとさせていただきます。

ご卒業おめでとうございます

平成27年3月25日

国立市立国立第七小学校 校長 森田弘文